
六月の竜

隅々

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

六月の竜

【Nコード】

N6371Z

【作者名】

隅々

【あらすじ】

ムーンライト様にて更新中の「六月のドラゴン」を対象年齢の引き下げをして更新します。

ストーリーは変わりません。

……生れつき目が見えない少女里枝は気が付いたら知らない場所にいた。助けてくれた親切な人には、鱗があつて、角があつて、牙があつて……ゆっくり進む異種間ラブファンタジー。

里枝は、生まれつき目が見えなかった。
慣れた今では、多少の不自由以外は問題ない。

つまり、たまには不慣れた時もある。
それは例えば今。

「…森？」

そう思ったのは香りと音、そして柔らかい素肌に触れる感触からだ。
った。

緑の香り、うるさいほどの鳥の囀り、土の感触。
それは、里枝が気がつく前に居た場所には到底あると思えない代物
だ。

「どつしよつ…」

里枝一人では、何も解決できない状況だ。

ここがどこかも、周りがどうなっているかわからない。
とりあえず人を捜す為進んでみるという行為は、里枝には危険過ぎ
た。

「どつしよつ…」

里枝は二度目の言葉を吐き出した。

里枝は溜め息をついた。

動くのは危険だけど、ここにずっといるのも同じくらい危険だからだ。

移動するにしても、棒か何かあればいいのだが、こんな場所では望めないだろう。

せいぜい木の枝くらいしかない。

とりあえずその木の枝が欲しくて周りに手を伸ばしたが。

「…っ！」

里枝は伸ばした手をさっと引っ込め、もう片方の手で庇うように抱き込んだ。

（今のは、なんだろう）

温かいそれは、まるで人の肌だった。

里枝はゴクリと唾を飲み込むと、勇気を出してもう一度じっくり触ることにした。

とにかく見えない分を他の感覚で補おうとした。

ゆっくりと触れていき、やはりそれが人の形をしていることがわかった。

指先と思われる場所から、どんどん上を触っていき、やがて腕の形を知る事ができた。

がっしりとした腕と肩、太い首、しっかり出た喉仏で男性だとわかる。触れる顔立ちは端正。ただ不思議なのはその先だった。

額に、突起がある。

先にいくほど尖るそれは、角のようだ。

（角？ 角があるの？ この人…）

もっとじっくり触れようとした時だった。

「それ以上触るなら、・・・殺すぞ」

地の底から響くような声で威嚇されたのは。

三（前書き）

ここから注意書きがなければ数字のみのサブタイトルでは里枝視点
となります。

驚いた。

起きているなんて思っていなかったから。

「う、ごめんなさい。私触らないと分からないの」

気配で何となく分かることもあるけれど、正確なことは触ったりしないと分からない。

角の人は私の言葉に驚いているみたいだった。

横になっていた体を起こし、私を見つめている。

「…見えないのか」

「はい」

空気が動き、ふわりと何かが顔の前で止まった。

「…本当らしいな」

「はあ」

何をどうして「本当らしい」のかは解らないけれど、とにかく殺されないですむようだ。

何となく角の人の雰囲気も和らいだ気がする。

「人間の娘が、どうしてこんな場所にいる」

口調はきついけれど、声音は優しい。
先程とは変わって労るようにも聞こえる。

「分からないんです、気付いたらここにいました」

私もとにかく人に会えたことで安心していたから、角の人が言った
事の不自然さに気付かなかった。

「気付いたら…?」

角の人はそのまま黙ってしまった。

私はもう一度角に触りたくて仕方なかった。
だから、ついじっと見つめてしまっていたのかもしれない。

「……何だ?」

戸惑った声にはっとした。

…恥ずかしい。

「ごめんなさい! あの、角が、気になって……ごめんなさい」

顔から火がでそうで、謝罪は尻窄まりになってしまった。

角の人は黙っていたけれど、ふっと笑った気がした。

「ならば…気が済むまで、触れているがいい」

「わっ」

体を持ち上げられて、一瞬何が起こったのか解らなかった。
膝の上に抱き上げられたのだ。

腿の裏に感じる足は筋肉質で逞しくて、私はもっと恥ずかしくなっ
てしまった。

四

角の人は自分から、ゴルトハルト、と名乗った。

私もお返しに名乗ると、良い名だ、付けたのは親か、親はどんな人間か、と穏やかに尋ねられた。

私は応えながら、せっかくなので角を触らせて貰っている。

それにしても、良く出来た特殊メイクだと感心した。

まるで本当に生えているようだ。

「リエは迷子なのだな。気付いたらここにいたというのは不思議だが、親は近くにいるのだろう」

送ってやる、とゴルトハルトさんは私の頭を撫でながら言った。とてもありがたい申し出に私は断る理由などなかった。

「ありがとうございます」

なんて親切な人だろう。

気持ちも顔もほくほくする。

「竜族が弱き者を見捨てることなど有り得ない」

だから礼などいららない、とゴルトハルトさんは照れ臭そうに言った。

……竜族、と聞こえたけれど冗談か何かだろうか。

普段から私は視力を聴力などで補っているから、聞き間違いというのはあまりない。

もしかすると、ゴルトハルトさんはコスプレをしているのかもしれない。

そしてその世界感そのまま私と話してくれているのかもしれない。なら、そのままでもいいだろう。

「太陽が昇りきるまでには森から出られる。……見えないのなら、空を飛ぶのは恐ろしいだろう?。」

「空も飛べるんですか?。」

「無論」

本当は少しだけ興味があつただけど、コスプレをしている人に飛んでみて下さいなんて言えるはずもなく。

「地上で、お願いします」

「承知した」

このような流れで、私はゴルトハルトさんに抱えられながら森の出口を目指すことになったのだった。

竜の二（前書き）

竜の、とつく時はゴルトハルト視点です

竜の一

「ゴルトハルト様」

村の入口で声をかけられた。門番役の男だった。

「何だ」

「どちらへ行かれます。本日はアオローラ姫がお待ちのはずでしょう」

「…まだ時間はある。散策してくるだけだ」

アオローラは大老の娘で、私の定められた許婚である。今日はそのアオローラと会うようにと大老から命じられていたが、どうしても気分が乗らなかったのだ。

だから散策などと理由をつけて外に出て来てしまった。東の竜族の村は崖下にあり、崖の上には誰も手を加えたことの森が広がっている。

その森の中、気に入りの場所に腰を下ろし、青空を眺めた。感傷に浸りたいわけではなかったが、気分は鉛を溶かしたように重かった。

アオローラとは今までにも何度か顔を合わせた。彼女は確かに美しく聡明だが、自分の中の何かが「違う」と告げるのだ。重さに耐えかねてごろりと仰向けになった時だった。

娘が私の隣に座っているのに気付いたのは。

(いつの間)

突然そこに現れたのだ。

強靱な肉体と精神が自慢の竜族でも驚く。

「…森？」

その娘は確かにそう呟いた。まるで何故己がここにいるのか分からないかのよう。

人間がこんな場所にいることなど滅多にないのだが、ともすれば妖精にも見ることができる体からは人間の匂いしかなかった。

背の中ほどまで真っ直ぐ降ろされた黒い髪からは、優しい花の香がした。

だからしばらく見つめてみようと思ったのだ。

「どっしりよ…」

と、不安げに呟いた時から違和感があったのだ。

その違和感は間もなく解決することになる。

竜の二

「どっしょっしょ…」

二度目のその言葉は娘の混乱状態を表現していた。

娘は、しばらくすると何かを手探りで求めるように動き始めた。ぎこちない動きだ。

とん、と娘の指先が私に触れた。

娘は跳び上がらんばかりに驚き、その手をもう片方の手で庇った。そしてまた確かめるように私を触り始めた。

柔らかい指と掌の肉に、つい私は好きなようにさせてしまった。普段ならば有り得ないことだ。

目も閉じていたからか、娘は私が眠っていると思ったらしい。

小さな指が私の角に触れた。

焦ったように軽く離れたそれに私は残念に思った。

やはりただの人間の娘か。

人間は、それはそれは竜族を怖れるからな。

私の額から伸びる角で私が竜族であることに気づいたのだろう。

もっいいい。

まだ触れようとすると手を私は威嚇した。

「それ以上触るなら、……殺すぞ」

娘がもっと怖がるように、気持ちを込めて。

竜の三（前書き）

お気に入り登録して下さい。ありがとうございました。励みにさせていただきます。

竜の三

娘は面白いくらいに驚いた。

「う、ごめんなさい。私触らないと分からないの」

娘の目は私に向き合っても閉じられたままだ。

私の心はこの娘にとんでもない事をしてしまったかのように、罪悪感に占領されてしまった。
体を起こし、じっくり娘を見つめる。

「…見えないのか」

「はい」

ぱちりと開かれた双眸は黒い。

私は腰から短刀を抜き、娘の目の前で止めた。
しかし、娘は何の反応も示さない。

「…本当らしいな」

「はあ」

竜族にはドラゴニア法典という律令があり、そこには「明らかに己より弱いものは、慈しむべき」とある。

…この娘は、私より遥かに弱い。

生物の頂点たる竜と、目の見えぬ人の娘。

比べる必要もない。

「人間の娘が、どうしてこんな場所にいる」

人間が一人でこんな奥まで入り込めるほど、この森は安全ではない。娘は何故か嬉しそうに微笑んだ。

「分からないんです、気付いたらここにいました」

「気付いたら…？」

何者かが、この娘をこんな奥まで連れて来たというのか。ならば、何故。

深みに入りそうな思考は娘の熱い視線に中断せざるをえなかった。

「……何だ？」

見えないはずなのに、見られているように感じるのは何故だ。尋ねれば、娘は真っ赤になって謝罪した。

「ごめんなさい！あの、角が、気になって……ごめんなさい」

最後のほうは恥ずかしそうに俯いてしまったので、はっきりとは聞こえなかった。だが口許がつついっ緩む。

「ならば…気が済むまで、触れているがいい」

抱き上げてやり、膝上に乗せれば娘は小さな悲鳴をあげた。

初めて感じる、背をぞくぞくと駆け上がるような感覚が、病み付きになりそうだった。

竜の四

「私の名はゴルトハルトだ」

「里枝、です」

首まで真っ赤になっているのがほほえましい。
竜族にはいない種類の娘だな。

行き場のなさそうな手を私の角に導いてやると、リエは怖ず怖ずと触り始めた。

リエの緊張を解してやろうと色々話しかけることにした。

「良い名だ。付けたのは親か」

「は、はい」

「親はどんな人間だ」

「えっと、父は厳しくて、母は優しいです」

これほど大人しい娘だ。どんな人間が育てたのか気になったが普通
のようだ。

リエもひとしきり角に触り、満足したように見える。

リエともっとこうして居たいが、今日はアオローラと会っただった。
せめて送ろう。

「リエは迷子なのだな。気付いたらここにいたというのは不思議だ

が、親は近くにいるのだろうか」

まだこんな子供のリエを森の奥に置き去りにするわけがない。もし意図があるなら、リエは捨てられた子になってしまふ。柔らかい髪を撫でると、リエはまた嬉しそうに笑うのだった。

「ありがとうございます」

眩しいと思った。

「竜族が弱き者を見捨てることなど有り得ない…だから、礼など要らん」

リエは少し戸惑ったようだったが私の見間違いだろうか。

「太陽が昇りきるまでには森から出られる。……見えないなら、空を飛ぶのは恐ろしいだろう？」

落とすことなど有り得ないが、リエともう少し一緒に居たいという気持ちがあったのも確かだ。

「空も飛べるんですか？」

「無論」

飛べない竜族などいない。

ここにいたって、私はある仮定を導き出した。

リエは、もしや竜族というものを知らないのではないか？

それならば、今までの言動に納得がいくというもの。

しかし、この世界に生まれながら竜族という存在を知らないなど…

有り得るのだろうか。

悩んでいるうちにリ工はどうするか決めてしまった。

「地上で、お願いします」

「承知した」

考えるのは歩きながらで構わないだろう…そう、私は自分に言い聞かせ、とにかくくり工を連れて歩き始めた。

五

ゴルトハルトさんはとても力持ちだった。

何故なら、私を片腕で支えながらも何時間も歩いているからだ。

「あのう・・・重くありませんか？」

目が見えなくても、腕を貸してもらえれば歩ける。

しかし彼の答えは渋いものだった。

「・・・この程度で重いなど言っていたら、我々は生活できない」

「どうして、ですか？」

歩くスピードがほんの少し速くなり、私は舌を咬まないように気を付けなければいけなかった。

体を支えてもらっているほうの腕の力も、若干強くなった気がする。

「我々は崖の下に住んでいる。水やわずかな食料以外は全て、崖の上から運ばなければならぬのだ」

「どうやって、ですか？」

崖下、という事は周りの土砂が崩れやすいということ。
ヘリコプターで運ぶのは危険だし、効率も悪い。
ゴルトハルトさんは溜息をつくど、ピタリと歩くのをやめてしまっ
た。

私は、何か悪い事を聞いてしまったのだろうか、不安になった。

「ゴルトハルトさん・・・？」

ゴルトハルトさんは暫く黙っていた。

どんな顔をしているか判らないから、黙られると私は何もわからな
い。

何年も一緒に居る人ならば雰囲気から、何となく感じられる事はあ
る。

けれど、この人とは出会ったばかりだ。

怒っているのか、悲しんでいるのかさえ、わからない。

「・・・リエ、お前はやはり、竜族というものを知らないのだな」

ああ、やっぱり、彼は怒っていたのだ。

彼のコスプレの世界観がわからないと、はっきり言えば良かっただ
ろうか。

「・・・ごめんなさい」

「ああ、謝らなくていい。・・・怒っているわけではない」

怒っては、いない？

「しかし竜族のことを今まで知らずに育つとは・・・お前の親は、余程お前が大切なのだろうな」

「・・・ちよつとよく、わからないんですが」

ゴルトハルトさんの言葉では、本気で自分が竜族だといっているように聞こえる。

わからないと言った瞬間、彼の体が強張った。

彼は熱っぽい声で私に話す。

「だが我々は、人間の伝承のように弱いものを傷付けたりしない。リエ、お前のことも話せばきっと、皆優しくしてくれるのだぞ」

「え？ あの」

「私が送るなどと言ったから、言い出せなかったのか？」

「・・・」

「すまなかつた・・・だが、心配するな。お前一人くらい食わせてやる事など、造作も無い」

「……家に送って下さるんじゃないんですか？」

弾丸のようなゴルトハルトさんの台詞に、やっと言葉を挟めることができた。

良く分からない方向に話が流れてしまっている。

「お前のような弱い子供を、森に置き去りにするような親に返せるものか！」

………これって、誘拐ですか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6371z/>

六月の竜

2011年12月29日08時45分発行